使徒の働き前半のビデオでは
イエスが世界の王として高く上げられていくシーンから
使徒の働きが始まることを見ました
イエスはご自身の臨在である聖霊を送ると約束しました
それによって信徒たちは力を受けてイエスの王国についての良い知らせを
イエスが戻ってこられる日まで宣べ伝え続けることができるのです
その働きは預言者たちに約束されていたように
エルサレムで聖霊がイエスの信徒たちに下り
彼らを新しい神殿とした時に始まりました
しかしこれがエルサレムの指導者たちとの間に
軋轢を生みクリスチャンに対する迫害が始まりました
しかし聖霊はこんなことからも良い結果を生みだし
ユダヤ人中心だったイエスの共同体をエルサレムの外に押し広げ
多民族からなる国際的な運動へと拡大してくださったのです
そしてこのイエスの多様な共同体の土台となったのは
この地域の最大都市だったアンティオキアの教会でした
後半はバルナバとパウロがアンティオキア教会に仕え
聖霊に押し出されて教会が二人を宣教旅行に送り出したという
この書の新しいセクションから始まります
パウロと彼の同労者たちがローマ帝国のさまざまな街を旅し
イエスこそ王であるという良い知らせを宣べ伝えていくのです
最初の宣教旅行は現在のトルコにあたる小アジアの内陸で行われ
エルサレムでの使徒たちの重要な会議をもって終わりました
第二次宣教旅行では小アジアを通ってギリシャへ行き
第三次宣教旅行は同じ地域を通りパウロがエルサレムに引き返して終わります
これらの物語を書き記すにあたって
ルカは幾つかの重要なテーマを繰り返し強調しています
まずは引き続き行われていたイスラエルへの宣教です
パウロが新しい街に入ると
いつも最初にユダヤ人のシナゴーグに行き
よみがえられた王イエスが多民族から成る新しい神の家族を形成していることを伝えました
多くの人々がイエスをメシアと認めましたがパウロに対立する人々もいて
パウロをトーラーやユダヤの伝統に楯突く
危険人物と見なして街の外に追い出すこともありました
その緊迫感が第一次宣教旅行のあとに頂点に達したため

エルサレムで重要な会議が開かれたのです
ある時パウロは由々しきことを知りました
それはアンティオキアの一部のユダヤ人クリスチャンたちが
非ユダヤ人は割礼安息日食事規定などを実践してユダヤ人にならなければ
イエスの共同体に加われないと主張していたことです
パウロとバルナバはそれに猛然と抗議し
エルサレムにおいて指導者たちによる会議を開きました
その会議でペテロパウロまたイエスの兄弟のヤコブは
聖書と自分たちの経験から神の計画は最初から
すべての国の人々をご自身の契約の民に加えることであったと語りました
そして手紙を書き非ユダヤ人クリスチャンは
異教の神殿での生贄の儀式に参加するのは避けるべきだが
ユダヤ人の民族的なアイデンティティーやそれに関わるトーラーの掟を
取り入れる必要はないと伝えました
これはイエスを信じる者たちにとって画期的な決定でした
イエスはユダヤ人のメシアですが
同時にすべての国々を治めるよみがえりの王なのです
そのためイエスの民であるかどうかは
民族的なアイデンティティーやそれに関わるトーラーの掟に
従うか否かにはよらずただイエスに信頼し
イエスの教えに従うことによるのです
この多民族から成るイエスの共同体という現実が
次のテーマにつながっていきます
それは宣教旅行の中で初代クリスチャンたちが経験した
ギリシャローマ世界との文化的な衝突です
ルカはピリピアテネエペソなどでさまざまな対立があったことを記しています
パウロはイエスが唯一のまことの神の啓示であり
世界の王であることを宣べ伝え
それによって他の神々や偶像が力のない無益なものであることを明らかにしました
このメッセージはローマのライフスタイルを覆そうとするものとみなされ
パウロは危険な反社会的革命家として非難されました
これは唯一神を信じる多民族からなるイエスの共同体が
ローマ人たちの常識や価値観からすると理解不能だったことを示しています
当時の世界はクリスチャンたちのような生き方を
見たことも聞いたこともなかったので疑いと恐れを抱いたのです
ルカが繰り返したもう一つのテーマは

パウロやほかのクリスチャンたちが絶えず
謀反やローマ皇帝に対する反逆罪などで糾弾されたことです
人々はイエスという別の王がいるという
パウロの主張を確かに聞いていましたし
またクリスチャンの生き方がローマの価値観を脅かすものであると認識しました
しかしパウロが逮捕されてローマの役人の前で尋問を受けるたびに
危険なことをしたという事実を見出せなかったため彼を釈放していました
これらの物語は初代教会が世界に示した逆説を伝えています
彼らはユダヤ人メシアを信じる人々なのに多民族から成り
男性と女性富む者と貧しい者奴隷と自由人を対等に扱う共同体であり
イエスただ一人を王として忠誠を誓いほかの神々も王も持たないのです
彼らの存在そのものがローマ文化の核心を覆すものでした
しかし彼らが軍事的脅威になることはありません
イエスが平和の民であるようにと教えたからです
だからパウロやクリスチャンを訴える口実となるのは
ローマの社会秩序を乱すという点だけでした
最後のセクションでは再びエルサレムからローマへの
パウロの宣教に焦点が当てられています
彼の最後の宣教旅行はエルサレムで終わりましたが
そこではすでに彼について賛否両論がありました
パウロはイスラエルの伝統を踏みにじったと考えるユダヤ人に攻撃され
ローマ兵はパウロをエジプトから来て騒ぎを起こしているテロリストだと思い逮捕しました
パウロはまずエルサレムの最高法院に属するユダヤ人指導者たち
次にカイサリアのローマの指導者たちのもとで裁判にかけられます
フェリクス総督はフェストゥス総督に判断を任せ
パウロはフェストゥスによってアグリッパ王の前に連れていかれました
しかしパウロがしたことといえば
よみがえりの希望は王なるイエスによって成就されたと宣べ伝えただけなので
どの裁判でも有罪にすることはできなかったのですが
それでも何年もの間牢に入れられることになりました
そして有罪とは言えなくてもローマの法制度によれば
パウロをこのまま釈放することもできなかったのです
最後にパウロは最高裁に上訴しました
この投獄期間はパウロにとってつらい時間に思えます
というのも彼の一番の願いは

旅を続けてイエスの新しい共同体を立ち上げることだったからです
しかし聖霊はすべてを益にしてくださいました
投獄されたことでパウロには諸教会への手紙を書く時間ができ
これによって彼の死後もずっとその宣教の遺産が受け継がれてきたのです
パウロはその後囚人としてローマに移送中
死と隣り合わせの恐ろしい船旅で地中海を渡ったあと
ローマで自宅軟禁され延期になっていた裁判を待つことになりました
その間居心地のいい家でユダヤ人や異邦人と面会することもできたのです
この書はパウロが全く自由に少しも妨げられることなく
神の国を宣べ伝えメシアなる主イエスについて教えたということと
これらがすべてローマ皇帝のおひざ元で起きたことを述べて終わっています
ルカの福音書と使徒の働きの連作が教えてくれることは
イエスと初代教会の歴史に留まりません
ルカはイエスの生涯死よみがえりまた下った聖霊そして力づけられた教会が
エルサレムから地の果てにまで宣教することを通して
神の国が天にあるように地にも来たことを示しているのです
またルカはこの物語を通して
王なるイエスに忠実であるとはどのようなことなのかも示しています
それはよみがえられた王なるイエスの良い知らせを
言葉でも行動でも人々に分かち合っていくことです
また多様性のあるイエスの共同体を作り
あらゆる人を集め皆平等に扱い
王なるイエスに忠誠を誓ってその教えに従って生きることです
これらすべてのことは
聖霊の力と導きに信頼することによって実現するのです
これが使徒の働きです

【要約】
イエスは聖霊を約束し、信徒たちはその力を受けてイエスの王国の良い知らせを伝えることができる。聖霊の働きはエルサレムで始まり、迫害を引き起こしたが、イエスの共同体は多民族の国際的な運動へと広がった。アンティオキアの教会が土台となり、パウロとバルナバは宣教旅行に出発。テーマはユダヤへの宣教、文化的衝突、ローマへの反逆。最後にパウロの宣教旅行が焦点となり、彼は投獄されるが、手紙を書いて宣教の遺産を残す。この物語は神の国が広がり、王なるイエスに忠実であることを示し、聖霊の導きと力を信頼することが重要であることを伝えている。